



© 2007 Focus Features LLC. All Rights Reserved.

「男は黙って…」の美学って、 京男に似合うんじゃないかなあ。

車は右ハンドルで左側通行。舞台はイギリスである。古い街には積み重なったルールってものがある。例えば、アナタが西陣や祇園のど真ん中に引っ越してきたならば、それを知らなう。そのぐらいならまあ「ご近所付き合い」レベルだが、大陸には民族を超えた軌跡がある。同作の主人公はロンドン内のロシア・マフィアの運転手（ヴィゴ・モーテンセン）。習得したというロシア訛りの英語は秀逸！と、ロシア移民の助産師（ナオミ・ワツ

ツ）。それ（民族的なテーマ）はそれで大切なテーマなんだろうが、同作の真のテーマは「男の美学」と僕は見る。唐突に風林火山に例えると「林」と「山」。静かに、動じず。慌てず、騒がず。ヨーロッパ映画の「無音の表現」は日本人好みだし、そのテーマに似合っている。アクションー辺倒とは観後感が違う。男子は同作に男の美学を学ばよし。きっと女子は「チャラい？ 何ソレ？ どういう意味？」ってなるから。（竹中 聡／本誌）

■「イースタン・プロミス」
■監督／デヴィッド・クロネンバーグ
■出演／ヴィゴ・モーテンセン、ナオミ・ワッツ、ヴァンサン・カッセル 他
■京都シネマ
■6月下旬～公開予定
■06-6345-0551（日活株式会社 関西支社）

タクシデルミア～ある剥製師の遺言



過激につき、鑑賞で用心！ 超「グロカッコいい」奇作。

チラシに「本作には刺激的と思われる映像があります。体調の悪い時の鑑賞にはご注意ください」という警句。…いや、「思われる」どころか、一体どれだけの人が鑑賞に抱えられるか疑問な作品ではある。冒頭から変態男のイチモツが火を噴く自慰シーン。その息子が大食い大会の選手が盛大に嘔吐するゲロの滝（食前の鑑賞もご注意ください）、そしてその息子の剥製師による血みどろの人間剥製術。親子三代に渡る人間の欲望・肉体

の限界・永遠の命への挑戦を過激に描く超・問題作である。黒すぎて笑えないブラックジョークはチェコのシュルレアリスト・シュワンクマイエル、臓物フェティッシュな剥製作りはハルンバイン全篇にちりばめられた「グロカッコいい」アートセンスはマシュー・パーニーを、それぞれしのぐテンション。エコだ癒しだとユルみきった表現世界に、東欧ハンガリーからキツすぎる一発！

（沢田眉香子）

■「タクシデルミア～ある剥製師の遺言」
■監督／パールフィ・ジョルジ
■音楽／アモン・トビン
■京都みなみ会館
■～6.6（Fri）（以後も再映予定あり）
■075-342-4050（RCS）



～京女・真摯のactive life～

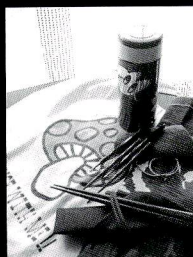
芸妓自身!!

「エコゲイコ」の巻

京都はええとこです、しかし…夏は年々暑おすねえ。

ずーっと京都に住んでますけどこんな暑かったかな!? っと思ってまして、「もお着物、アツイ!!」ってマイユニフォームが辛い日も（涙）。そんな中、地球のどこかでは大地震が起きたり、自然災害も多く、ニュースを見る度に「人事ではないぞ」という気持ちが増し、'02年にリリースしたアルバム「to be or not」の「Who's」という曲では「地球は誰のものでも無かったはずだ」という歌詞で表現してみた。

とは言え、現実みんな生きてゆくのに必死なのかもしれない、私も含め、人々は何らかの欲を求める。しかし、自然破壊が続くと地球滅亡の危機が何代か先の子孫に及ぶわけで…。



■Information

MAKOTO 環境を考えよう呼びかけコンサートに出演
7/5（Sat）
『Live! Do You KYOTO?2008』
～京都から世界へ・母なる地球を守りたい～
◎円山公演音楽堂
問い合わせ■ナウ ウェストワン（☎075-252-5150）

MAKOTOブログ 京女のつれづれ草
<http://www.cafeble.com/kyoto/>

MAKOTO率いる京都発信エンターテイメントチームHP
<http://www.chimalabel.com>



私的考えでゆきますと温暖化防止策「やるべきかやらざるべきか＝to be or not」うーん、良いとされる事はやらへんよりやるほうがええやろおー、っと。ほんまに「身近なコトからコツコツと」ですが、エコバッグを持ち歩いたり、CMに出させて頂いている象印のマイボトルはほんまに持ち歩きまくってたり、シャンプーする時には蛇口を止めたり、まだ勇気が無くて実践できていないけどマイお箸だったり…、ちょいとずつ心がけている次第でございます。

驚いたことはゴミの仕分けをすると黄色い袋で捨てるゴミの量がほんまに減ったという事実。ま、自炊しないので（苦笑）。ほんまにちょっとした事でCO2なるものが減ってゆくのであればみんなで協力しようではありませんか。ってな訳で着古した着物も捨てられずに山積みになってきてはおりますが、和風エコバッグを自ら作り、アメリカ旅行の際、おみやげにしようと文化と環境の融合を思案中なMAKOTOでした。